Osaka Shoin Women's University Repository

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（三）

北村英子

本稿は、前稿『『源氏物語』における「ゆかし」の考察(二)』（「樟蔭国文学」・第二十五号）に引続き、「玉鬘」の巻から「ゆかし」の語義および好奇心・欲求を成興する感覚、又対象等について、逐一紙副の許す限り、用語例を検討しつつ考察する。

「玉鬘」の巻では「ゆかし」という語は三例見当たる。それ等の用語例を検討していく。

○豊後介「三条、ここに召す」と、呼び寄する女を見れば、また見し人なり。故御方に、下人なれど、久しく仕うまつり馴れて、かの隠れたまへりし御住み処までありし者なりけり、と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。

一番目の用語例は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で表われる。語義は「ゆかしけれ（ど）」に下接する、「見ゆべくも構えず」の文から考察して、視覚意識が働いているものと思われ、「見たいけれ（ど）」と意味付けするのが相応しい。そして、「豊後介が『三条よ。こちらで（姫君の御方に）お呼びだ（玉鬘の食膳を下げさせるため）』と、呼び寄する女を見ると、これもまた右近が見た人である。亡き御方（夕顔）のもとで、下働きの女だったけれども、久しくお仕え申していて、夕顔が内大臣（頭中将）の北の方の脅迫を避けて身を隠していた西の京や五条の家にまで、お供していった者だったではないか、とはっきり見とどけると、本当に夢のようだ。先客の（玉鬘）主人とおぼしい人はと、右近は大そう見たいけれど、見られないように軟障など構えてある。」という叙述描写中の「ゆかしけれ（ど）」は、「見たい」という視覚的好奇心が旺盛に涌き起こるが、軟障の隔てがあるため「見られそうにない」と、右近は主人とおぼしき人を姫君であるかどうか、一きわ「見たい」という好奇心を強く昂揚させながらも、「見られそうにない」と視覚意識を萎縮させる。このような心情の起伏が伺われる。

Osaka Shoin Women's University Repository

次の用語例を検討する。

○かの末摘花の言ふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさま、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしく思さるるなりけり。

二番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「見たく」と一応意味付ける。そして、「源氏は末摘花がお話しにならない程の人であった事を思い出して、落ぶれた境遇で育った玉鬘に対しては、心配で気になるので、まず手紙の様子を見たくお思いになるのである」という叙述描写である。即ち、本用語例中の「ゆかしく」は「見たく」と視覚意識を先ず働かせ、「手紙を見たく（読みたく）お思いになる」が、手紙を読む事によって、玉鬘の外観よりも、知識や人柄の方に好奇心が惹きつけられ、それを知りたく思う心情が推察出来る。源氏は手紙を読むという視覚を働かせるが、次に意識路を通り心裡で玉鬘の知識や人柄を知りたく思うのである。これは「ゆかしく」という感覚を表わす語に、「思さるる」という心中で意識を強く持ち続ける語に伴なわせている事によってもいえよう。結局、「ゆかしく思さるる」は、「読んで知りたくお思いになる」という視覚的行動と心情的欲求を意味するものと考えられる。

次の用語例の検討に移る。

○源氏「灯ともそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものとこそ聞け、さも思さぬか」とて、几帳すこし押しやりたまふ。

三番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は「親の顔」とあるから、「見たい」と意味付けるのが相応しい。即ち、源氏は語る。「この灯はほんとに色恋めかしい心地がする。親の顔は見たいものだと聞いているが、（玉鬘）そうもお思いになりませんか」と。女房たちに、自分が実父であるかの如く思わせる源氏の心理が伺われる。そして、「さも思さぬか」と、玉鬘の顔をよく見たいために問う。結局、この「ゆかしき」は姫君が実父に「会いたい」という視覚的欲求を源氏が察して、言葉の中に使用したものである。

さて、「玉鬘」の巻を検討してきたが、三例共視覚意識を通して、人が人を知りたい・会いたい心情を示している。

次の「初音」の巻・「胡蝶」の巻には、この用語は皆無であった。

次の「螢」の巻には二例見当たる。

○ただ母君の御をぢなりける宰相ばかりの人のむすめにて、心ばせなど口惜しからぬが、世に衰へ残りたるを、尋ねとりたまへる。宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたも大人びたる人なれば、さるべきをりをりの御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。ものなどのたまふさまを、ゆかしと思すなるべし。

一番目の用語例は、「ゆかし」と形容詞の終止形で表われる。

語義は「ものなどのたまふさまを」とあるところから考察して、「聞きたい」と意味付けるのが相応しい。そこで、「ゆかし」の周辺の描写を述べると、「螢兵部卿宮が、玉鬘を尋ねて来て、玉鬘にあ

Osaka Shoin Women's University Repository

れこれ言い迫る様子を、源氏はどんな事をおっしゃるのか聞きたいとお思いになる」という、源氏の旺盛な好奇心が伺い知れる。源氏は玉鬘に好色感情を抱いているため、螢兵部卿宮が玉鬘に対してなす言動を意識する。従って、本用語例中の「ゆかし」は「聞きたい」という聴覚的欲求が強く感じられるが、一方、言い迫る様子も目で「見たい」という視覚的好奇心も潜在しているものと思われる。このように詳細に、「ゆかし」の感覚を考察すると、「聞いたり・見たりして知りたい」欲求の複合感覚を示すものと思われる。又、「ゆかし」は「思す」という心中で意識を強く持ち続ける語に共有し、一層「ゆかし」の感覚を増強させている。

次の用語例の検討に移る。

○さるは、まことにゆかしげなきさまにはもてなし果てじ、と大臣は思しけり、なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくやは思ひきこえたまへる。

二番目の用語例は、形容詞の連体形で表われる。

語義は「人聞のよくない」と意味付けするのが最も相応しい。そして、「源氏は、玉鬘に愛情を感じているけれども、本当に人聞きのよくない様子（即ち、側室）にはするまいと大臣はお思いになっていた。やはり、一度は言い迫って口説いてみる源氏の御性分で、秋好中宮などをも、非常に綺麗に源氏が思い切り申していらっしゃるのであろうか。」と現代語訳出来よう。この「ゆかしげなき」の感覚をもう少し詳細に考察すると、源氏が養女である玉鬘を側室扱いにした場合、世の中の人々がその様子を「見たり・聞いたり」して、よい感情を持たない状態を示し、源氏がその世評を気にし意識を消失させる。従って、本用語中の「ゆかしげなき」は、当人の意識でなく、他者が良くない意識で捉えた複合感覚を示し、それを当人が心配して行動を自制する意志をのぞかせている。

さて、「螢」の巻の二例を検討してきたが、一方は、当人の「聞いたり・見たりして知りたい」複合感覚を、一方は、他者が「見たり・聞いたり」した場合、「奥ゆかしくない」印象を表わす複合感覚を示している。

次の「常夏」の巻では六例を数える。それ等を一例ずつ検討していく。

○源氏「少将、侍従などゐて参うで来たり。いと翔り来まほしげに思へるを、中将のいと実法の人にてゐて来ぬ、無人なめりかし。この人々は、みな思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひて、ゆかしく思ふべかめるわざなれば、この家のおぼえ、内々のくだくだしきほどよりは、いと世に過ぎて、ことごとしくなむ言ひ思ひなすべかめる。

一番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「見たい」と意味付けるのが相応しい。そして、「身分の低い女でも、深窓の中にいる間は、その身分に応じて、（心がひかれ）見たいと思うものでしょうから」と現代語訳出来よう。即ち、この「ゆかし」は男が身分の低い女・高い女にそれぞれ、それなりの魅力を感じ、「見たい・会いたい」という視覚的欲求が切々と涌

Osaka Shoin Women's University Repository

き起こる。それから、意識路を経て、話してみたいという行動が、心中深くに潜在しているものと考えられる。又、「ゆかしく」という感覚を示す語に「思う」という、心中で意識を強く持ち続ける語に接続させ、「見たい」という感覚をより強く持続させている。

次の用語例を見てみる。

○玉鬘「このわたりにてさりぬべき御遊びのをりなどに、聞きはべりなんや。あやしき山がつなどの中にも、まねぶものあまたはべるなることなれば、おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるはさまことにやはべらむ」と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、

二番目の用語例は、「ゆかしげに」と、形容動詞の連用形で表われる。

語義は「聞きたそうに」と意味付けるのが相応しい。因に、この周辺の描写を述べると、玉鬘の父が和琴の弾き手の名手である事を源氏が語る。玉鬘は、その父内大臣の和琴の音色がいかに高雅なものであるか、「聞きたく」思うという、玉鬘の非常に熱心な聴覚的意識をのぞかせている。と同時に父を敬慕する気持ちを払拭し切れず会って話したいという慕情も混入しているものと考えられる。再び用語例を見ると、「ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば」とあり、玉鬘のひどく切願する心理が伺われる。

この叙述描写に連繋する文を次に示す。

○源氏「さかし。あづまとぞ名も立ち下りたるやうなれど、御前の御遊びにも、まづ書司を召すは、他の国は知らず。ここにはこれを物の親としたるにこそあめれ。その中にも、親としつべき御手より弾きとりたまへらむは、心ことなりなむかし。ここになども、さるべからむをりにはものしたまひなむを、この琴に、手惜しまずなど、あきらかに搔き鳴らしたまはむことや難からむ。物の上手は、いづれの道も心やすからずのみぞあめる。さりともつひには聞きたまひてむかし」とて、調べすこし弾きたまふ。ことつひいと二なく、今めかしくをかし。「これにもまされる音や出づらむ」と、親の御ゆかしさたち添ひて、この事にてさへ、「いかならむ世に、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむ」など思ひゐたまへり。

これは、三番目の用語例で、「御ゆかしさ」と名詞で表われる。

語義は「お会いしたい」と意味付けるのが相応しい。この場面は、二番目の用語例の玉鬘の言葉を受けて、源氏が再び語る。玉鬘の父が和琴の弾き手の第一人者である事を。そして、自らも和琴を少しお弾きになる。その音色がはなやかでおもしろいと。玉鬘は聞き入りつつ、父は「これにもまされる音や出づらむ」と、誇り高い心情が徐々に昂じ、父に早く「お会いしたい」という思慕の念にかられ、和琴につけても、「どのような世に、こうして内大臣が、打解けて和琴をお弾きになるのを聞けるのだろう」と、玉鬘の待ち佗びる心情が感取出来る。こういう描写中の「御ゆかしさ」は、実父内大臣を玉鬘が懐しむ心情が一入増強し、「お会いしたい」という視覚意識が急速に働き切望する。そして、「話したい」、和琴の高雅な音色を「聞いてみたい」というさまざまな願意が心中深く交差している

Osaka Shoin Women's University Repository

ものと感知出来る。

次の用語例の検討に移る。

○「……太政大臣の后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづの事に通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめく事もあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。げにさもあることなれど、人として、心にも、するわざにも、立ててなびく方は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。この君の人となり、宮仕に出だし立てたまはむ世の気色こそ、いとゆかしけれ」などのたまひて、

四番目の用語例は、内大臣の言葉の末尾に「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で一きわ感情を込めて表われる。

語義は「見たいものだ」と意味付けるのが最適のように思われる。それは、内大臣が源氏に対して批判意識を醸成し、源氏が明石の姫君を教育したがその教育方針通り成長せず、生得の資質にしたがって成長するであろう。そして、源氏が宮仕えにお出しなさる時の美しい姫君の姿を「見たいものだ」という、内大臣の視覚意識が涌き起っている。その心裡には、源氏に対する対抗意識と、明石の姫君がうるわしく成長した女人の映像を求めてやまぬ美意識が交差して、「ゆかしい」感覚が働いているのであろうと思われる。この「ゆかしけれ」は、視覚意識が強く働いているものと思われるが、視覚意識の他聴覚意識も混在した複合感覚と察せられる。従って、「見たり・聞いたりして知りたいものだ」という心情が感得出来る。

次の用語例は五番目になる。

○内大臣「かくてものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。こと繁くのみありて、とぶらひ参うでずや」とのたまへば、例のいと舌疾にて、近江の君「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。年ごろおぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常にえ見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬ心地しはべれ」と聞こえたまふ。

この例文中には、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「会いたい」と意味付けるのが相応しい。そして、「こうしてここに居させて頂いておりますのに、なんの心配がございましょう。長い年月気がかりになって、お会いしたいとお思い申していた父君のお顔を、常に拝見できませんことだけは、双六で良い目の出ないと同じような気持ちがするのでございます」と現代語訳出来よう。近江の君の視覚的欲求である。即ち、父に敬慕の情をこめて話す言葉の中に、「ゆかしく思ひ」と、「思ひ」という心を動かし続ける語と共に用いられ「会いたい」意識を強く持続させている。この「会いたい」意識下には、「話したい」「いつもそばに居たい」等の思いが心裡に潜在しているものと考えられる。

「常夏」の最後の用語例を検討する。

○女御の御方の台盤所に寄りて、童「これ参らせたまへ」と言ふ。下仕見知りて、「北の対にさぶらふ童なりけり」とて、御文取り入る。大輔の君といふ、持て参りて、ひき解きて御覧ぜさす。女御ほほ笑みてうち置かせたまへるを、中納言の君といふ、近くさぶらひて、そばそば見けり。中納言「いと今めかし

Osaka Shoin Women's University Repository

き御文の気色にもはべめるかな」と、ゆかしげに思ひたれば、女御「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。

六番目の用語例は、「ゆかしげに」と形容動詞の連用形で表われる。

語義は「（その文を）見たそうに」と意味付けするのが相応しい。それは、中納言が「大変当世風な御手紙のようでございますね」と言うと、その草書体の文字の洒落た書きぶりに興味を感じ「見たそうに」好奇心を昂揚させている。中納言の君は手紙の内容に関心があるのではなく、草書体のくずしの書体に関心があり、その書美を熟視したいという学書態度が伺われる。そして出来たらそのように洒落た書体で書いてみたいという意識が潜在しているようである。「ゆかしげに」という感覚語に「思ひ」という心中の意識を強く持続させる語を伴なわせ、「見たそうに」する意識を一層昂揚させている。

さて、「常夏」の巻では、以上検討してきた如く六個所にわたって、「ゆかし」の用語が見られる。これをまとめると、形容詞の連用形「ゆかしく」の二例において、又、形容動詞の連用形「ゆかしげに」の二例において、すべて、「思う」という心をその方向に動かし続ける語を伴ない、一きわ強く意識を昂揚し続けている。又、三番目の用語例には「御ゆかしさ」と名詞形で表われるが、「ゆかしさ」に「御」が伴ない、「御ゆかしさ」と玉鬘が実父に「お会いしたい」気持ちを、和琴にことよせて、対面を切望する個所に敬意表現で用いられる。こういう用例は、「源氏物語」中、ただこの一例のみ見られ希少である。因に、「ゆかしさ」という名詞形はこの巻の他、「絵合」の巻に一例、「維本」の巻に一例、計三例見当たるのみである。「常夏」の巻のあと一例は、形容詞の已然形で、言葉の末尾に「ゆかしけれ」（見たいものだ）と強意表現で使用されている。以上、見てきた通り六例中の五例はすべて、「見たい・会いたい」等の視覚意識が働くものばかりであるが、あとの一例、即ち、二番目の用語例のみ「聞きたそうに」と聴覚的意識が働く例である。総じて、この「常夏」の巻においては、人物の視覚的欲求を示す場合が大半を占めている。それは、人の感覚は、視覚機能がより一層強く発達しているという表われからきているのではないかと考えられる。

次の「篝火」の巻では、「ゆかし」という語を調査してみたが一語も見当たらなかった。

次の「野分」の巻を調査してみると、「奥ゆかし」という関連語が一例のみ見当たるが、この語については、稿を改めて考察する予定である。従って、本稿で問題にしている「ゆかし」という語は、二語を数える。その二語について検討する。

○夕霧「さばかりの色も思ひわかざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」など、かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくももてなさず、いとすくすくしう気高し。またも書いたまうて、馬助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御随身などに、うちささめきて取らするを、若き人々ただならずゆかしがる。

Osaka Shoin Women's University Repository

一番目の用語例は、「ゆかしがる」と動詞の終止形で表われる。

語義は「知りたがる」と意味付けし、「（見たり聞いたりして）知りたがる」という複合感覚が涌き起こる。それは、夕霧が書いた二通の文のうち、後の一通は、どの女性に渡るのであろうか、その宛て先を女房たちは知りたく好奇心が募るのである。即ち、夕霧が意識しているもう一人の相手の女性は誰であるか、女房達は大いに関心があり知りたがる。女性特有の羨望意識が伺われる。

本断章の連繋文に次のような用語例が見当たる。

○渡らせたまふとて、人々うちそよめき、几帳ひきなほしなどす。見つる花の顔どもも、思ひくらべまほしうて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻びより見れば、物のそばより、ただ這ひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。

二番目の用語例は、「ものゆかしから（ぬ）」と、接頭語「もの」プラス形容詞の未然形「ゆかしから」プラス打消の助動詞「ぬ」から組成された形態で表われる。この語は『源氏物語』全巻を通じて、ただこの「野分」の巻に一例のみ存在する希少な形態を持つ語である。

語義は「見たくない」と意味付けるのが相応しい。そして、「明石の姫君が、紫上の方からこちらにお戻りになるというので、女房達がざわつきだし、几帳をなおしたりしている。夕霧は先程見た紫上（樺桜）と玉鬘（八重山吹）を、明石の姫君と比べたくて、いつもは見たくない心地なのに、今日は無理に妻戸の御簾をひきかぶって、几帳の綻びからのぞくと、明石姫は物陰からそっと通ってこられるところがちらっと見えた」と現代語訳する事が出来、まめ男の夕霧は、いつもはなぜか明石の姫君に興味を示さないのに今日は好奇心が涌く。即ち、見たいと思わなかった心情から、だんだん興味が涌き起り「見たい」という心情に変化するその心の揺れを感知する事が出来る。

さて「野分」の巻では、「奥ゆかし」という関連語彙を除いて二例を検討してきた。前者は「ゆかしがる」という動詞形で、女房達が夕霧の書いた二通目の手紙が誰に渡るか知りたいという、女房達の好奇心を示し、後者は「ものゆかしからぬ」と、「ゆかし」に接頭語がプラスされた否定形で用いられ、『源氏物語』中にただ一例しか見られない希少な形態の語で、「見たくない」という夕霧が八歳になる明石姫に興味を示さない心情を示している。

次の「行幸」の巻ではただ一例を数える。

○亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。例の御設けをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御肴まゐらせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべけれど、引き結びたまふほど、え忍びたまはぬ気色なり。

この用語例には、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

本用語例中でも、「ゆかしう」という連用形に「思う」という心を動かす語を伴わせているのは興味がある。語義は「会いたい」と語

Osaka Shoin Women's University Repository

訳するのが最も相応しい。即ち、「御殿油は、普通の裳着の所にともすよりは、内大臣が実父であるため少し明るくしてあって、趣のあるおもてなしをなさる。内大臣ははなはだしく玉鬘に会いたいと思っていらっしゃるけれども、今宵は大そう突然であるようだから、腰に裳をお結びになるときなど、ようこらえきれない様子である。」という叙述描写中に、内大臣が娘の玉鬘に「会いたい」と切なる願望意識を昂揚させ、そして、視的覚感を働かせる。その心裡には、父が娘を思う温情的心理が潜在し、「会って話しがしたい」という行動的欲求も秘められているものと思われる。

次の「藤袴」の巻においても、「真木柱」の巻においても、この「ゆかし」という用語は皆無であった。

以上 本稿では、「玉鬘」の巻から「真木柱」の巻まで十巻を検討してきた。

（続）